バラク・オバマの第一回大統領就任演説をめぐる考察

花木　亨

要　旨

本稿においては，アメリカ合衆国大統領バラク・オバマの第一回大統領就任演説について考察する。まず，大統領就任演説全般およびオバマの演説に関する先行研究を確認する。続いて，オバマの第一回大統領就任演説の内容を確認する。最後に，この就任演説におけるオバマの語りの特徴を整理する。この就任演説において，オバマは過去の大統領就任演説の基本的特徴を継承しつつ，文化的多様性を擁護すると同時に，二項対立的な語りを退けようとしている。さらに，オバマはアメリカ人たちの潜在力を強調し，アメリカ合衆国の伝統的価値観を再確認すると同時に，理性的な公的議論を促進しようとしている。

1. はじめに

本稿では，バラク・オバマが 2009 年 1 月 20 日の第一回アメリカ合衆国大統領就任式において行なった演説について考察する。2007 年 2 月 10 日の大統領選出馬表明演説以来，オバマは数々の演説を繰り広げながら，大統領選の予備選と本選を勝ち抜いた。希望と変革を基調としたこれらの演説において，オバマは黒人か白人か，民主党か共和党かといった従来の二者択一ではなく，過去か未来かの二者択一を聴衆に迫った。オバマの語りは，現職大統領ジョージ・W・ブッシュ，民主党大統領候補を目指したヒラリー・クリ

ントン，共和党大統領候補ジョン・マケインらに代表される旧来のワシントン政治の体現者たちに対して，オバマを新しい時代の指導者として印象づけた。その訴えは幅広い有権者たちの心を掴み，オバマはアフリカ系の血をひく黒人として初めてアメリカ合衆国大統領に選出された。

オバマがその超党派的な語りによって大統領の座へと導かれたのは事実である。しかし，その一方で，熾烈な選挙戦はアメリカ合衆国の有権者たちの間に亀裂を生じさせた。大統領選本選における一般投票の得票率を見ると，オバマが 52.9%だったのに対して，マケインは 45.7%だった（Federal Elections 2008, 2009）。つまり，大統領選本選で投票した有権者のうち，半数近くはオバマを支持していなかったことになる。したがって，オバマは大統領就任演説において，自分を支持した約半分のアメリカ人たちの期待を裏切らないように配慮しながら，自分を支持しなかった約半分のアメリカ人たちに対して，大統領としての自分を信頼するよう呼びかけなければならなかった。

大統領就任演説は新大統領にいくつかの重要な課題を突き付ける。大統領選によって分断されたアメリカ人たちを一つにまとめること，アメリカ合衆国の伝統的価値観を再確認すること，新政権の基本政策を明示すること，そして行政府の長にふさわしい人間として自分を提示することなどの課題である。オバマはこれらの課題にどのように立ち向かったのだろうか。オバマの名を全米に知らしめた 2004 年民主党全国大会基調演説以来，オバマは人種，党派，階級，宗教などの多様性を内に抱えながらも一つに統合されたアメリカ社会の実現を訴えてきた。その訴えは大統領就任演説にどのような形で引き継がれているだろうか。本稿ではこれらの問いに対して，コミュニケーション研究の観点から一つの応答を試みる。

2. 先行研究

キャンベルとジェイミソンによれば，大統領就任演説は演示レトリック（epideictic rhetoric）の一種である[1)]。この演説において，新大統領は格調高く洗練された語りの形式を採用しつつ，アメリカ合衆国の過去と未来を現在へと結び付ける。また，この演説において，新大統領は自分の政権が主導する民主的統治に向けて，アメリカ市民たちと新たな契約（covenant）を結ぶ（Campbell & Jamieson, 2008, pp. 29−56）。キャンベルとジェイミソンによれば，大統領就任演説には以下の 4 つの特徴がある。第一に，大統領就任演説は聴衆を一つの民（the people）としてまとめると同時に，彼らに就任の儀式に立ち会い，それを承認する機会を与える。第二に，大統領就任演説は過去から引き継がれ，人々に共有された価値観を確認する。第三に，大統領就任演説は新政権が指針とする政治的原則を明らかにする。第四に，大統領就任演説は，新大統領が行政府の長としての役割を果たし得ることを示す（Campbell & Jamieson, 2008, pp. 29−56）。オバマの大統領就任演説には，これらの 4 つの特徴がどのような形で表れているだろうか。

オバマの演説に焦点を絞ったコミュニケーション研究は複数存在する（e.g., Dilliplane, 2012; Frank, 2009, 2011; Frank & McPhail, 2005; Murphy, 2011; Rowland, 2011; Rowland & Jones, 2007, 2011; Terrill, 2009, 2011; 鈴木, 2010; 花木, 2010, 2014a, 2014b, 2015）。その中で，デイビッド・フランクの論文はオバマの第一回大統領就任演説を直接の分析対象としている（Frank, 2011）。フランクによれば，オバマはこの就任演説において，科学と宗教に象徴される諸々の二項対立を突き崩しつつ，アメリカ合衆国のアイデンティティーを再定義しようとしている。フランクはまず，ジョン・マーフィーの議論を踏まえつつ，アメリカ合衆国の市民宗教（civil religion）には二つの表現様式があることを確認する。一つは，永久不変の原則，伝統，共和党，キリスト教右派に象徴される語りである。そして，もう一つは，変化，進歩，民主党，公民権運動に象徴され

る語りである（c.f., Murphy, 2008）。フランクによれば，大統領就任演説におけるオバマは，抑制的かつコスモポリタンな宗教観を語りつつ，これらの二つの語りの間に橋を渡そうとする。オバマの語りは，公共的理性や科学的思考を捨て去ることなく，多元的民主主義において信仰が果たし得る役割を擁護する。

フランクは 2008 年のオバマの演説「A More Perfect Union」を分析した別の論文においても，オバマの語りと宗教との関わりを論じている（Frank, 2009）。オバマがヒラリー・クリントンと民主党大統領候補の座をかけて選挙戦を繰り広げている最中，オバマが懇意にしていた牧師ジェレマイア・ライトの説教動画が広くメディアに流通し，物議を醸した。過激な言葉でアメリカ社会を痛烈に批判するライトの説教は，主流メディアと白人を中心としたアメリカ人たちによって危険視され，オバマもライトと同じような過激思想を持っているのではないかという疑念を生んだ。これを受けて行なった「A More Perfect Union」演説において，オバマはアメリカ社会における人種をめぐる現実を繊細に語り，聴衆がライトの説教を適切に理解するための文脈を与えようとした。この演説において，オバマは黒人を含むすべての人々の解放を目指したマーティン・ルーサー・キング・ジュニアに倣いつつ，黒人教会に根差す「預言の声（prophetic voice）」の伝統をアメリカ合衆国の進歩の歴史の中に位置づけようとした。ここには，宗教をめぐる語彙をキリスト教保守派のもとから奪還し，これをリベラルで進歩的な政治へと結び付けようとするオバマの試みが確認できる。

オバマの演説についてのコミュニケーション研究は，概してオバマの語りが文化的差異を越えて多様な聴衆を魅了する力を備えていることを強調する。たとえば，ロウランドとジョーンズの研究は，オバマがその演説において，多元的かつ普遍的なアメリカン・ドリームの物語を語ることで，多様なアメリカ人たちを一つに束ねようとしていると指摘する（Rowland & Jones, 2007, 2011）。ロウランドとジョーンズによれば，アメリカン・ドリームとは

普通の人々（ordinary people）が勤勉と弛まぬ努力とによって偉業（extraordinary things）を成し遂げる物語である（Rowland & Jones, 2007, p. 430）。この物語には，個人と社会という二つの側面が含まれている。その個人的側面においては，自助努力，自己責任，自己実現といった保守的な価値観が強調される。その一方で，その社会的側面においては，共感，連帯，社会的公正への関心といったリベラルな価値観が強調される。オバマはその演説において，これらの二つの側面を同時に引き受けつつ，保守とリベラルという政治的二項対立を越えた多元的で普遍的なアメリカン・ドリームの物語を語っている。そして，そのことがオバマの演説に超党派的な魅力を与えている（Rowland & Jones, 2007, 2011）。

またフランクは 2004 年民主党全国大会基調演説におけるオバマの語りにアメリカ合衆国における人種的統合の可能性を見出し，これを「統合のレトリック（rhetoric of consilience）」と呼んで評価する（Frank & McPhail, 2005）。フランクによれば，アフリカ系黒人の父親とヨーロッパ系白人の母親の間に生まれ，黒人社会と白人社会を往復しながら成長したオバマは，黒人たちが共有する差別の記憶を忘れることなく，黒人以外の人々の悲痛な体験について語ることができる。そして，その語りをとおして，あらゆる肌の色をしたアメリカ人たちを自由と平等のより完全な実現という共通の目標に向けて動員することができる。

超党派性，多元性，多様性に加えてオバマの語りを特徴づけるのは，理性に対する信頼である。ロウランドによれば，2009 年 9 月 9 日にアメリカ合衆国議会合同会議においてオバマが行なった医療保険制度改革についての演説には，公共的理性（public reason）とマディソン的民主主義に対するオバマの信頼が反映されている（Rowland, 2011）。アメリカ合衆国憲法と権利章典の執筆者として知られる第四代大統領ジェイムズ・マディソンは，自由で開かれた議論をとおして，よりよいアイディアが自然に優勢となり，最終的にもっとも優れたアイディアが勝ち残っていくと信じていた。そして，この

自由で開かれた議論の中から生まれる公共的理性の働きによって政府を制御することが，民主主義の理想だと考えていた（Rowland, 2011, p. 695）。ロウランドによれば，オバマの演説には，このマディソンの理想が引き継がれている。

以下では，これらの先行研究を踏まえつつ，オバマの第一回大統領就任演説を分析する。まず第 3 節において，この演説の内容を確認する。そして第 4 節において，この演説におけるオバマの語りの特徴を整理する。

3. 演説内容の確認

2009 年 1 月 20 日火曜日，アメリカ合衆国議会議事堂西側正面において大統領就任式典が開催され，バラク・オバマは第 44 代アメリカ合衆国大統領に就任した。エイブラハム•リンカーン生誕 200 周年を記念する年，マーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師記念日（Martin Luther King, Jr. Day）の翌日のことだった。凍てつく寒さにもかかわらず，会場には 100 万人を超える人々が詰めかけ，史上初の黒人大統領の誕生を見守った。その中には，第二次世界大戦の退役軍人，公民権運動活動家，そして冷戦も公民権運動も知らない若者たちなど，幅広い世代のアメリカ人たちが含まれていた。それ以外にも，テレビやインターネットをとおして，全米および世界中の人々がこの歴史的瞬間を目の当たりにした（Hulse, 2009, January 21; Sanger, 2009, January 20）。

式典では，リック・ウォレン（Rick Warren）とジョセフ・ロウリー（Joseph Lowery）という二人の対照的な牧師が祈りを捧げたことが注目された。福音派の白人牧師であるウォレンは，同性愛者の結婚に反対するなど，保守的な言動で知られる。その一方で，統一メソジスト教会の黒人牧師ロウリーは，マーティン・ルーサー・キング・ジュニアとともに公民権運動を率いたことで有名である。保守とリベラルを象徴するかのようなこれらの牧師の起用に，

宗派と党派による対立を乗り越えようとするオバマの意志を確認することができる（Grossman, 2009, January 22）。

1861 年，エイブラハム・リンカーンが第一回大統領就任の際に使用した聖書に手をあてて就任宣誓を行なったオバマは，新大統領としてアメリカ人たちに語りかけた。この就任演説において，オバマは何を語ったのだろうか。以下では，この演説の内容を確認する[2)]。

3–1．嵐の中の出発

オバマは自分を大統領に選んだアメリカ市民たちとジョージ・W・ブッシュ前大統領に対して感謝の言葉を述べた後，アメリカ合衆国が置かれている現状について確認することで就任演説を始める。オバマによれば，大統領就任宣誓は常に平和と繁栄のうちに行なわれてきたわけではない。それは「垂れ込める暗雲や荒れ狂う嵐の中（amidst gathering clouds and raging storms）」で行なわれることもあった（Obama, 2009, January 20）。しかし，そうした状況においても，アメリカ合衆国がその歩みを止めることはなかった。それが可能となったのは，一人一人のアメリカ人が先人たちの理想と建国の理念に対して忠実であり続けたからだ。こうしてオバマは，立ちはだかる困難に立ち向かい，それを一つずつ克服していくことがアメリカ合衆国の伝統であることを確認する。

その上で，オバマはアメリカ合衆国が危機に直面しているという認識を聴衆と共有しようとする。アメリカ合衆国は，広範囲に及ぶ暴力と憎悪のネットワークに対して戦争を行なっている最中である。その経済は，一部のアメリカ人たちの強欲と無責任によって，そしてすべてのアメリカ人たちが新しい時代に向けての準備と決断を怠ったことによって，疲弊している。家と職は失われ，会社は廃業に追い込まれている。医療費はかさみ，教育はうまく機能していない。アメリカ人たちのエネルギー消費のあり方は，競争相手に利益を与えると同時に，地球を痛めつけている。データや統計資料によって

確認できるこれらの危機に加えてオバマが危惧するのは，アメリカ人たちが自信を喪失しつつあるという事実である。アメリカ合衆国の没落は避けられないのではないか，次の世代のアメリカ人たちは目標を下げなければいけないのではないかという不安が，アメリカ人たちを覆っている。このようにオバマはアメリカ合衆国が置かれている厳しい状況を確認する。

3–2. 希望という伝統

オバマはアメリカ人たちが直面する深刻な問題の数々を列挙し，その解決が困難であることを認めた上で，それでもそれらの問題はいずれ解決されるだろうと聴衆に告げる。その根拠としてオバマが挙げるのは，大統領就任式に集まった聴衆の存在である。彼らは恐怖や対立や不和の代わりに，希望と共通の目標を選び取った。彼らは些細な不平や不満，守られない約束，他者に対する非難，そして偏狭さによって象徴される政治に終止符を打つことを決めた。オバマによれば，その選挙戦において希望を語り続けた自分が大統領に選出されたという事実が，アメリカ合衆国の未来が希望に満ちていることを指し示している。

ここでオバマは，聖書の一節を引用しつつ，「幼稚なことに拘泥するのをやめる（set aside childish things）」ときが来たと宣言する（Obama, 2009, January 20）[3)]。この言葉には，過去の政治的停滞と訣別し，新しいアメリカ合衆国の未来を展望しようとするオバマの意志が反映されているが，その一方でオバマは自分の目指す政治がアメリカ合衆国の伝統に深く根差したものだということを強調することを忘れない。オバマによれば，アメリカ人たちは今，一つの世代から次の世代へと手渡されてきた崇高な理念を継承し，それを実現するよう求められている。それは 1776 年にアメリカ合衆国独立宣言に書き込まれた理念，すなわち「すべての人間は生まれながらにして平等であり，その創造主によって，生命，自由，および幸福の追求を含む不可侵の権利を与えられている」という理念である（The Declaration of Independence, 1776）。

この理念が「神によって与えられた約束（the God-given promise）」であると語ることで，オバマは自分の政権がアメリカ合衆国における宗教的伝統に忠実であることを聴衆に印象づけていく（Obama, 2009, January 20）。

3–3. アメリカ人たちの歴史的歩み

オバマはアメリカ合衆国の偉大さは所与のものではなく，アメリカ人たちの不断の努力によって勝ち取られたものであると述べる。アメリカ合衆国の進歩の歴史を担ってきたのは，臆病な者たちや怠惰な者たちではなく，危険を覚悟の上で行動する者たちや新しいものを創り出そうとする者たちである。そうした無数の男たちと女たちが，自由と繁栄へと向かう長く険しい道のりを歩んできた。彼らは新しい生活を夢見て，わずかな荷物を手に海を渡った。彼らは工場での過酷な労働に従事し，西部を開拓した。彼らは命を顧みず，独立戦争，南北戦争，第二次世界大戦，そしてベトナム戦争を戦った。彼らは次の世代の人々の暮らしが少しでもよくなることを願って，休む間もなく働き，人生を捧げた。そして，彼らはアメリカ合衆国を個人の願いの集積よりも大きいもの，生まれや財産や派閥の違いを越えて偉大なものとして思い描いた。

このようにアメリカ人たちの歴史的歩みを概観したオバマは，その歩みを継続することを聴衆に求める。アメリカ合衆国はもっとも豊かで，もっとも強力な国であり続けている。アメリカ合衆国の労働力は，経済危機が始まる前と比べて低下していない。アメリカ人たちは独創性に溢れ，その商品やサービスは今でも必要とされている。オバマはこのように述べつつ，アメリカ人たちの潜在力に衰えが見られないことを確認する。その一方で，オバマは私利私欲を守ろうとしたり，困難な決断を先延ばしにしたりするようなことは止めようと提案する。

オバマはここで，1936 年公開のミュージカル映画『Swing Time（邦題：有頂天時代）』の中で使われた歌の歌詞を引用しつつ，「今日を機に，起き

上がり，埃を払って，アメリカを作り直すという仕事に再び取り掛かろう（Starting today, we must pick ourselves up, dust ourselves off, and begin again the work of remaking America.）」と述べる（Obama, 2009, January 20）。この映画が公開された 1930 年代，世界は大恐慌（The Great Depression）の最中にあった。これに対抗するべく，民主党出身の大統領フランクリン・D・ローズヴェルトはニューディール政策を展開し，市場への積極的関与を推進した。この歴史的事実を踏まえれば，オバマは上の歌詞を引用することで，自分の新政権が置かれている状況を当時のアメリカ合衆国の状況に重ねると同時に，そこからの脱却の可能性を暗示していると考えられる（Rich, 2009, January 25）。

こうしてアメリカ人たちを特徴づけてきた前向きさと不屈の精神を確認したオバマは，現代を生きるアメリカ人たちが取り組まなければならない課題を列挙していく。疲弊するアメリカ経済は，大胆で迅速な対応を求めている。これに対して，オバマはただ単に雇用を生み出すだけではなく，新たな成長の基盤を整えることで応えようとする。オバマは道路や橋を造り，電力系統やデジタル回線を整備することを提案する。これによって，人々が結び付けられ，経済が活性化されることが期待される。また，オバマは科学技術を最大限活用することを呼びかける。これによって，医療の質を高めると同時に，それにかかる費用を抑えることができるかもしれない。さらに，オバマは再生可能エネルギーを普及させることや教育制度を刷新することを提案する。

ここで注目すべきは，オバマが「科学を本来あるべき地位に復権させる（restore science to its rightful place）」と述べている事実だろう（Obama, 2009, January 20）。この言葉には，アメリカ合衆国の進歩の歴史は科学的合理性によって支えられているというオバマの信念が反映されている。また，この言葉からは，過去 8 年間のブッシュ前政権において科学的思考が隅に追いやられてきたとオバマが考えていることが読み取れる。オバマの目指す政治においては，宗教と科学が補完し合いながら，アメリカ合衆国の進歩を駆動することが期待されている。そこでは，アメリカ合衆国における宗教的伝統と科

学的伝統がともに継承され，尊重されている。

3–4. 政府と市場の役割

オバマは自分の構想の実現可能性に対して疑問を投げかける者たちがいることを想定しつつ，そのような者たちはアメリカ合衆国に秘められた潜在力を過小評価していると述べる。オバマによれば，彼らは自分たちの足元で起こった地殻変動に気づいていない。アメリカ人たちにとって，政府が大き過ぎるか，それとも小さ過ぎるかという問いは，もはや重要ではない。重要なのは，政府が機能しているかどうかという問いである。アメリカ合衆国の家族が妥当な賃金の職に就き，手頃な価格で医療を受け，退職後にまともな生活を送るために，政府がどれだけ役立っているかということが，今，問われている。人々の暮らしに役立つ政策は継続され，そうでない政策は中止されなければならない。

ここでオバマはリベラル派と保守派の間で繰り返されてきた「大きな政府」か「小さな政府」かという二者択一をめぐる論争を乗り越え，より機能的な政府の実現を志向することで，政府への信頼を取り戻そうとする。公金を預かる者たちには，それを賢く使う責任があるとオバマは言う。政府は悪癖を改め，公明正大に資金を運用しなければならない。そうすることによってのみ，「市民と政府の間の極めて重要な信頼関係を取り戻す（restore the vital trust between a people and their government）」ことができる（Obama, 2009, January 20）。このオバマの言葉からは，ブッシュ前政権において政府が市民たちの信頼を失ったとオバマが考えていること，そしてオバマがその失われた信頼を取り戻そうとしていることが読み取れる。

続いてオバマは市場の役割について語る。オバマによれば，「大きな政府」か「小さな政府」かという問いと同様に，市場が善か悪かという問いは本質的ではない。富を生み出し，自由を広めるという点において，市場に匹敵するものはない。その一方で，今回の経済危機が明るみに出したことは，注意

深く目を光らせていなければ，市場は制御不能に陥るという事実である。富める者を優遇するだけでは国は繁栄しない。経済的成功は GDP のみによって決まるのではない。それは豊かさがどれだけの範囲に及ぶかということにも影響される。ここでは，意欲あるすべての人々が成功の機会を手にすることができるかどうかが問われている。慈悲の心によるのではなく，公共の利益（common good）を最大化するという目的のために，富の共有が求められている。このようにオバマは政府が適切に市場を監視する必要性を説き，市場に多くを委ねようとしたブッシュ前政権からの訣別を告げる。

3–5. 戦争と平和

イラクとアフガニスタンにおいて二つの戦争を戦う国の大統領となったオバマにとって，戦争と平和について語ることは避けられなかった。オバマはここで，国民の安全か建国理念の尊重かという二者択一を見せかけのものとして退ける。建国の父たちは想像を絶するような危機に直面しながらも，法の支配と人権の尊重のために尽力した。その理念は今も世界を照らしており，アメリカ人たちは目先の都合のためにこれを諦めるべきではない。オバマはこのように述べ，戦時中においても法の支配と人権の尊重という原則を守り抜く決意を示す。グアンタナモ湾収容キャンプをめぐる議論に象徴されるように，アメリカ合衆国が対テロ戦争において人権侵害を犯しているのではないかという指摘が度々なされており，オバマの発言はこれに対する応答だと考えられる。オバマは世界中の大小様々な国々に対して，アメリカ合衆国が平和と尊厳に満ちた未来を目指す人々の味方であると呼びかける。そして，アメリカ合衆国には「再び世界を牽引していく準備がある（we are ready to lead once more）」と告げる（Obama, 2009, January 20）。この言葉には，前政権による単独行動主義的な外交政策から，より国際協調主義的な路線へと舵を切ろうとするオバマの意志を確認することができる。

オバマの外交姿勢は，これに続く彼の言葉にも確認できる。オバマによれ

ば，自分たちの前の世代のアメリカ人たちは，ミサイルと戦車だけでなく，揺るぎない同盟関係と確固たる信念によって，ファシズムと共産主義を打ち破った。彼らは軍事力のみによって自分たちが守られるわけではないということ，そして軍事力が好き勝手な振る舞いを正当化するわけではないということを理解していた。アメリカ合衆国の力は，それを賢明に用いることによって高まっていく。アメリカ合衆国の安全は，その理念の正しさ，その模範としての説得力，そして謙虚さと自己抑制によってもたらされる。オバマは先人たちがこれらのことを知っていたと述べ，現代のアメリカ人たちはこの遺産の継承者であると訴える。

現代のアメリカ人たちが直面している新しい脅威に対して，オバマは多国間のより緊密な協調と相互理解によって立ち向かおうとする。オバマはイラクをイラクの人々の手に委ねると同時に，アフガニスタンにおいて平和を構築する作業を始めようとする。また，古くからの同盟国とかつての敵国と力を合わせながら，核の脅威を軽減させ，地球温暖化を防ごうと呼びかける。アメリカ人たちはアメリカ的な生活を弁解しないし，それを守ることをためらわないとオバマは言う。そして，恐怖と殺戮によって自己の目的を達成しようとする者たちに対して，アメリカ的精神は必ず彼らを打ち倒すだろうと宣告する。

3–6. 多様性の擁護

国際的な理解と協調を志向するオバマは，その外交姿勢の根拠として，アメリカ合衆国の多様性がもたらす強さを挙げる。アメリカ合衆国は，キリスト教徒，イスラム教徒，ユダヤ教徒，ヒンズー教徒，そして宗教を信じない者たちによって構成されており，そこには世界各地の言語と文化が流れ込んでいる。アメリカ人たちは南北戦争と人種隔離政策の暗い過去を乗り越え，少しずつ国としての統合を進めてきた。だから彼らは憎しみがやがて消え去り，民族を隔てる壁がやがて崩れ去ると信じずにはいられない。世界が小さ

くなっていくにつれて，普遍的な人間性が自ずと姿を現すと信じずにはいられない。そして，新しい平和の時代を迎え入れるために自分たちが果たすべき役割を果たさなければならないと信じずにはいられない。

アメリカ合衆国大統領がその就任演説において無宗教者に言及するのは初めてのことだとされる（Grossman, 2009, January 22）。このことから，オバマがアメリカ合衆国の多様性について，歴代大統領よりも包括的な見解を持っていることがわかる。オバマはアメリカ合衆国の宗教的伝統を尊重する一方で，宗教を信じない者たちをそこから排除しない。オバマによれば，多様性こそがアメリカ合衆国の本質であり，力の源である。異質な他者との遭遇は時に誤解や対立を生んできたが，この国の進歩の歴史はそうした誤解や対立を少しずつ乗り越えてきた。オバマは現代のアメリカ人たちがその歩みを引き継ぎ，さらに前へ推し進めることを期待する。また，彼らが多様性の尊重というアメリカ合衆国の伝統的価値観を世界へと広め，地球規模での多文化の共存を主導していくことを呼びかける。

3–7. 世界へのメッセージ

国際協調と多様性の尊重という自政権の基本的姿勢を確認したオバマは，世界へ向けて語りかける。イスラム世界に対しては，共通の利益と互いに対する敬意に基づきながら，新しい道を模索しようと呼びかける。争いの種を蒔いたり，自分たちの国の問題を西洋のせいにしたりする指導者たちに対しては，国民は何を破壊したかではなく，何を創造したかによって指導者を評価するだろうと諭す。そして，汚職や欺瞞や異論の封殺によって権力にしがみつこうとする者たちに対しては，彼らのやり方が間違っていることを歴史が証明するだろうと説く。その一方で，オバマはこれらの指導者たちがその強権的姿勢を改めるならば，自分たちは彼らに手を差し伸べるだろうとも述べ，アメリカ合衆国と異なる価値観を持つ国々との間にも対話の可能性を開いておこうとする。

発展途上国に対して，オバマは彼らの農地が豊かになるように，また水道からきれいな水が流れ出るようにするための協力を自分たちは惜しまないと約束する。その一方で，物質的豊かさを享受するアメリカ合衆国のような先進国に対しては，他国の苦しみについてもっと関心を持つよう促す。先進国には何の考慮もなしに世界の資源を使い続けることはできない。世界は変わったのだから，私たちも変わらなければならない。オバマはこのように述べ，持続可能な成長に向けての地球規模での協調を求めていく。

3–8. 兵士と普通の人々

世界に向けて語りかけたオバマは，続いて自国に目を転じ，アメリカ合衆国を支える人々について語る。オバマが就任演説を行なっている最中にも，アメリカ合衆国の兵士たちは遠方の砂漠や山岳を巡回している。オバマによれば，これらの兵士たちは，アーリントン国立墓地に眠る兵士たちと同様，アメリカ人たちにとって大切なことを伝えている。アメリカ人たちがこれらの兵士たちに対して尊敬の念を抱くのは，彼らが自由の守護者であるからというだけではなく，彼らが奉仕の精神を体現しているからだ。彼らは自分自身よりも大きな何かに意味を見出そうとしている。そして，この歴史的瞬間においてアメリカ人たちに求められているのは，まさにこの精神である。こうしてオバマは兵士たちのアメリカ合衆国に対する献身を称える。

大統領選におけるオバマの一連の演説の主役は，普通のアメリカ人たちだった。オバマは大統領就任演説においても，アメリカ合衆国を支えるのが普通のアメリカ人たちの信念と決意であることを強調する。オバマによれば，堤防が決壊したときに見知らぬ人を受け入れる優しさや，友人が職を失うのを見るぐらいなら自分の労働時間を短縮することを選ぶ無私の精神が，アメリカ人たちに困難を乗り越えさせる。煙に満ちた階段を駆け上がる消防士の勇気と子どもを育てる親の意欲が，アメリカ合衆国の運命を決める。1961 年，ジョン・F・ケネディーはその就任演説において，「あなたの国があなたのた

めに何を成し得るかを問わないでほしい。あなたがあなたの国のために何を成し得るかを考えてほしい（Ask not what your country can do for you; ask what you can do for your country）」と述べた（Kennedy, 1961, January 20）。普通のアメリカ人たちの持つ潜在力に期待するオバマの言葉は，このケネディーの言葉と共鳴し合う。

3–9. 古い価値観

オバマはここで，自分の政治的信念がアメリカ合衆国を特徴づける古い価値観によって支えられていることを再確認する。アメリカ人たちが直面している課題や，その課題に対処するための手段は新しいものかもしれない。しかし，誠実さ，勤勉さ，勇気，フェアプレイの精神，寛容，好奇心，忠誠心，愛国心など，アメリカ人たちを成功へと導く価値観は古いものである。これらの価値観が，その歴史をとおして，アメリカ合衆国を静かに前へと推し進めてきた。オバマはこのように述べ，それらの古い価値観に立ち返ることを聴衆に促す。

オバマはこれを「新しい責任の時代（a new era of responsibility）」という言葉で表現する（Obama, 2009, January 20）。この言葉は，一人一人のアメリカ人が自分自身に対して，アメリカ合衆国に対して，そして世界に対して，義務を負っているということを意味している。オバマはアメリカ人たちが渋々ではなく，喜んでその義務を掴み取ることを期待する。なぜなら，困難な課題に全力で立ち向かうということほど，彼らの精神を満たし，彼らを特徴づけるものはないからだ。

それが市民であることの代価であり，市民であることがもたらす希望であるとオバマは言う。それがアメリカ人たちの自信の源である。運命を自ら切り拓いていくように神が呼びかけているということをアメリカ人たちは知っている。そして，それがアメリカ人たちにとっての自由と信条の意味である。だからこそ，あらゆる肌の色と信仰心を持った男と女と子どもたちがナ

ショナル・モールに集い，ともに祝うことができる。だからこそ，60 年前にはレストランで食事をすることもできなかったかもしれない父を持つ男が，もっとも神聖な宣誓を行なうことができる。オバマはこのように語り，アメリカ合衆国の伝統的価値観を再確認すると同時に，それが要求する市民としての責務を果たすことを聴衆に求めていく。

3–10. ジョージ・ワシントン

演説を終えるにあたり，オバマはアメリカ合衆国の建国期に思いを巡らす。アメリカ合衆国誕生の年，厳しい冬の寒さの中，凍った川のほとりの消えかけた焚き火の周りで，少数の愛国者たちが身を寄せ合った。首都は放棄されていた。敵は近づいていた。雪は血に染まっていた。革命の成功がもっとも危ぶまれたその瞬間，建国の父ジョージ・ワシントンは以下の言葉を人々に読み聞かせるよう命じた。

> Let it be told to the future world... that in the depth of winter, when nothing but hope and virtue could survive... that the city and the country, alarmed at one common danger, came forth to meet［it］.（Obama, 2009, January 20）

これは 1776 年にトーマス・ペインが公刊した小冊子『アメリカの危機（The American Crisis）第一巻』からの引用である（Paine, 1776, December 23）。ワシントンとともに建国の父の一人に数えられるペインは，『コモン・センス（Common Sense）』を著し，アメリカ合衆国独立の必然性を説いたことで有名である（Paine, 1776）。オバマはワシントンをめぐる逸話とペインによる文章に言及しながら，建国の父たちが困難に対して果敢に立ち向かったという史実を聴衆に思い起こさせる。そして以下のように続ける。

> America: In the face of our common dangers, in this winter of our hardship, let us

> remember these timeless words. With hope and virtue, let us brave once more the icy currents, and endure what storms may come. Let it be said by our children's children that when we were tested we refused to let this journey end, that we did not turn back nor did we falter; and with eyes fixed on the horizon and God's grace upon us, we carried forth that great gift of freedom and delivered it safely to future generations.（Obama, 2009, January 20）

オバマは現代のアメリカ人たちが直面する危機を，建国の父たちが直面した危機に重ね合わせる。そして，先人たちが希望と美徳を持って冬の寒さと強敵に立ち向かったように，現代アメリカ人たちが目の前の困難に臆することなく立ち向かうことを期待する。そうすれば，建国の父たちの物語と同様，現代アメリカ人たちの物語も後代のアメリカ人たちに語り継がれていくだろう。遠い未来を見据え，神の庇護を受けながら，自由という恵みを次の世代へと引き渡していく。アメリカ人たちは，建国以来，そうして歩み続けてきた。その歴史的歩みを引き継ぎ，さらに推し進めることを聴衆に促して，オバマは就任演説を終える。

4. オバマの語りの特徴

前節では，オバマの第一回大統領就任演説の内容を確認した。本節では，この演説に見られるいくつかの特徴を確認していく。第一に，この演説はキャンベルとジェイミソンが指摘する大統領就任演説の基本的特徴を備えている（Campbell & Jamieson, 2008, pp. 29−56）。この演説において，オバマは熾烈な大統領選によって分断されたアメリカ人たちを一つの民としてまとめると同時に，アメリカ合衆国の伝統的価値観を再確認しようとしている。また，自政権の方針を明らかにすると同時に，行政府の長にふさわしい政治家として自分自身を聴衆に印象づけようとしている。これらはいずれも大統領就任演

説に共通する特徴である。オバマはその洗練された語りによって，建国から現在を経て未来へと向かうアメリカ合衆国の物語の中に自分の政権を位置づけようとする。そして，自分が主導する新たな民主的統治に向けて，アメリカ市民たちとの間に信頼関係を構築しようとする。

第二に，この就任演説はオバマの他の演説に共通する特徴を備えている。2004 年民主党全国大会基調演説や 2008 年大統領選における一連の演説において，オバマは人種，党派，階級，宗教などの多様性を内に抱えつつも一つに統合されたアメリカ社会の姿を語ってきた。その傾向は今回の大統領就任演説にも引き継がれている。オバマはこの演説において，アメリカ合衆国がキリスト教徒，イスラム教徒，ユダヤ教徒，ヒンズー教徒，そして宗教を信じない者たちによって構成されていること，またそこには世界各地の言語と文化が流れ込んでいることを強調する。そして，その多様性こそがアメリカ合衆国の本質であり，力の源であると述べる。オバマはアメリカ人たちが異質な他者との遭遇を繰り返し，そこから生じる誤解や対立を少しずつ乗り越えてきたという歴史的事実を確認することで，多様性を尊重することがアメリカ的伝統の一部であることを聴衆に思い出させようとする。

これに関連して，第三に，オバマはこの就任演説において，諸々の二項対立を突き崩しながら，アメリカ合衆国のアイデンティティーを再定義しようとしている（Frank, 2011）。これを象徴するのが，宗教と科学という二項対立の放棄である。オバマは聖書からの引用を演説に盛り込んだり，アメリカ人たちの歴史的歩みが神によって庇護されていると述べたりしながら，アメリカ合衆国の宗教的伝統に敬意を示す。その一方で，オバマはアメリカ合衆国の進歩の歴史が科学の力によって支えられてきたという事実を強調し，この国に根付く科学的伝統を認識するよう聴衆に促す。オバマの語りにおいて，宗教と科学は対立し合うのではなく，互いに補完し合いながら，アメリカ合衆国の進歩を駆動していく。

第四に，オバマはこの就任演説において，普通のアメリカ人たちが不断の

努力によって自分たちの未来を切り拓いてきたという歴史を振り返り，そこに希望を見出そうとしている。オバマはアメリカ合衆国の歴史が危険を顧みずに行動する者たちや新しいものを創造しようとする者たちによって担われてきたという事実を確認する。これらの者たちは自由と繁栄を求めて海を渡り，数々の困難を乗り越えながら，アメリカ合衆国の歴史を前へと推し進めてきた。彼らは次の世代の人々の暮らしが少しでもよくなることを願って，また自由と平等という建国の理念がより完全なものとなることを願って，休まずに努力を続けてきた。オバマが語るこれらのアメリカ人たちの物語は，アメリカ社会を方向づけてきたアメリカン・ドリームの物語の一つの変奏である（Rowland & Jones, 2007, 2011）。そこでは，自助努力，自主自立，自己実現といった価値観に加えて，共感，連帯，無私，奉仕といった価値観が強調されている。こうしてオバマは，個人と社会，保守とリベラルといった二項対立を超越した多元的かつ普遍的なアメリカン・ドリームを語り，多様なアメリカ人たちがともに共通の未来を切り拓いていく可能性を示そうとする。

第五に，オバマはこの就任演説をとおして，アメリカ的伝統を再確認し，そこに立ち返ることを聴衆に迫っている。オバマは自分がこの演説において言及する自由，平等，連帯，奉仕，多様性，勤勉，誠実，勇気といった価値観のすべてがアメリカ合衆国の伝統であると述べる。そして自分が主導する新しい政治において，これらの伝統的価値観を取り戻そうとする。オバマによれば，保守的とされるブッシュ前政権が体現する政治は本来のアメリカ合衆国の伝統から逸脱していた。したがってオバマは，より革新的とされる自分の政権において忘れられたアメリカ的伝統を取り戻すことで，市民たちの求める変革を成し遂げようとする。ここに伝統と進歩，保守と革新という二項対立を突き崩そうとするオバマの試みを確認することができる。オバマはジョージ・ワシントンをめぐる逸話とトーマス・ペインの言葉によってこの演説を締めくくっている。独立革命を主導したこれらの人物に言及することで，オバマはアメリカ的伝統の起源に革新的な要素が含まれていたことを暗

示しようとしているようにも見える。

最後に，この就任演説には公共的理性と開かれた議論に対するオバマの信頼が反映されている（Rowland, 2011）。このことは科学を擁護しようとするオバマの一連の発言からも読み取れるが，それ以外にもオバマは演説のいくつかの箇所で，理性に基づく自由で開かれた議論をアメリカ市民たちに求めている。政府と市場の役割についてオバマが自分の見解を述べている箇所は，その一例である。オバマはアメリカ合衆国における政治的議論が「大きな政府」か「小さな政府」かという不毛な二者択一によって特徴づけられてきたことを指摘し，より本質的な問いは「政府がうまく機能しているかどうか」であると訴える。また，すべてを市場に任せようとする極論と市場そのものを放棄しようとする極論との間の対立を戒め，富の創出と分配が適切に行なわれるよう政府が市場を適切に監視していく必要性を説く。ここでは「小さな政府」を志向し，市場に多くを委ねようとしたブッシュ前政権からの訣別が示唆されているが，その一方でオバマは市場を悪とみなし，「大きな政府」を実現することでアメリカ合衆国が直面する問題が解消されるとは考えていない。オバマが求めるのは，二項対立的枠組みに思考を妨げられることなく，「よい政府とは何か」，「よい市場とは何か」といった本質的な問いをめぐって，市民たちが自由に意見を交わすことである。ここに公共的理性と開かれた議論に対するオバマの信頼を確認することができる。

5. おわりに

オバマの第一回大統領就任演説は，聴衆の間に様々な反応を引き起こした。作家でジャーナリストのマルコム・グラッドウェル（Malcolm Gladwell）は，「ブッシュが友だち（buddy），クリントンが優しいおじさん（kindly uncle）だったとすれば，オバマは王子（prince）だ」と述べ，オバマを「史上初の貴族的大統領（aristocratic president）である」と称えた（Reynolds, 2009, January

21）。また，作家のマーク・カーランスキー（Mark Kurlansky）は，オバマの演説が「世界とその中における私たちの役割について，歴史上のどの就任演説よりも洗練された見解を提供している」と絶賛した（Reynolds, 2009, January 21）。

このようにオバマの抑制的かつ洗練された語りを高く評価する者たちがいる一方で，これを陳腐な決まり文句に溢れたまとまりのない演説と批判する者たちもいた（Whatley, 2009, February 21）。たとえば，ジョージ・W・ブッシュ前大統領のスピーチ・ライターを務めたマイケル・ガーソン（Michael Gerson）は，「あんな使い古された言葉が，なぜ作家オバマの耳に適切なものと響いたのか正直わからない」と述べた（Gerson, 2009, January 21）。また，前任者に対する謝意と敬意を示すはずの就任演説において，オバマがジョージ・W・ブッシュ前大統領に対する批判の言葉を口にしたことについて，前政権関係者は不快感を示した（Baker, 2009, January 22）。新大統領が前任者の基本政策を本人の目の前で公然と退けるのは，1933 年，フランクリン・D・ローズヴェルト大統領の就任演説以来のことだとされる（Sanger, 2009, January 20）。

オバマが演説の中でブッシュ前大統領の政策を批判したことに対して前政権関係者が不快感を示したのは，彼らの立場からすれば自然なことかもしれない。しかし，新しく大統領首席補佐官に就任したラーム・エマニュエル（Rahm Emanuel）が指摘するように，このオバマによるブッシュ前政権批判には民意が反映されているということを忘れてはいけないだろう（Baker, 2009, January 22）。オバマは大統領選における一連の演説をとおして，前政権による政治を見直し，民衆を主体とした新しい政治を実現しようと聴衆に呼びかけた。アメリカ市民たちはそのオバマの呼びかけに応じ，オバマは大統領に選ばれた。この経緯を踏まえるならば，オバマが大統領就任演説においてブッシュ前政権からの訣別を宣言したのは当然だと言える。その一方で，オバマは自分の政権がアメリカ合衆国建国以来の伝統を継承していることを

強調することを忘れなかった。オバマによれば，ブッシュ前政権はアメリカ的伝統から逸脱した特異な政権であり，自分の政権こそがアメリカ的伝統を真に体現しているということになる。

オバマは第一回大統領就任演説において，語るべきことを語るべき仕方で語ったと評価していいように思われる。この演説におけるオバマは，新大統領としてアメリカ人たちを一つにまとめ，彼らとともに新しい時代の幕を開けようとした。その点において，オバマは大統領就任演説という修辞様式が彼に期待した最低限の役割を果たしたと言えるだろう。

註

1） アリストテレスはレトリックを，法廷レトリック（judicial rhetoric），演示レトリック（epideictic rhetoric），審議レトリック（deliberative rhetoric）の三種類に分類した。法廷レトリックは，過去に起こった出来事について，その真偽を明らかにし，罪と罰を定める。これは裁判所における法廷弁論などに対応している。演示レトリックは，現在における善いものを称賛し，悪いものを非難する。これは祭典における祝辞や葬儀における弔辞などに対応している。審議レトリックは，将来において何を為すべきかを決定する。これは国会で行なわれる政策討議などに対応している。これらは岩波文庫版『弁論術』においては，それぞれ法廷弁論，演説的弁論，議会弁論と訳されている（アリストテレス，1992; Aristotle, 2006）。

2） 以下の記述には，オバマの演説からの引用と筆者による説明が含まれている。

3）『コリントの信徒への手紙一』第 13 章 11 節，「幼子だったとき，わたしは幼子のように話し，幼子のように思い，幼子のように考えていた。成人した今，幼子のことを棄てた（put away childish things）。」より。

引用文献

アリストテレス（戸塚七郎訳）（1992）『弁論術』東京：岩波書店

鈴木健（2010）『政治レトリックとアメリカ文化――オバマに学ぶ説得コミュニケーション』東京：朝日出版社

花木亨（2010）「バラク・オバマは人種を語る――「A More Perfect Union」演説をめぐる考察――」,『ヒューマン・コミュニケーション研究』, 第 38 号, 日本コミュニケーション学会, pp. 143–157.

花木亨 (2014a)「バラク•オバマと人種――「A More Perfect Union」演説再考――」,『日本コミュニケーション研究』, 第 42 巻特別号, 日本コミュニケーション学会, pp. 31–49.

花木亨（2014b）「バラク・オバマは医療を語る――2009 年 9 月 9 日アメリカ合衆国議会合同会議における演説をめぐる考察――」,『日本コミュニケーション研究』, 第 43 巻第 1 号, 日本コミュニケーション学会, pp. 49–67.

花木亨（2015）「バラク・オバマは銃規制を語る――銃を持つ自由と暴力からの自由――」,『日本コミュニケーション研究』, 第 43 巻第 2 号, pp. 89–108.

Aristotle (2006). *On rhetoric: A theory of civic discourse (trans. George A. Kennedy)*. New York: Oxford University Press.

Baker, P. (2009, January 22). On plane to Texas, critiques of the speech. *The New York Times*. Retrieved from http://www.nytimes.com/2009/01/23/us/politics/22web-baker.html?_r=0

Campbell, K. K., & Jamieson, K. H. (2008). *Presidents creating the presidency: Deeds done in words*. Chicago, IL: University of Chicago Press.

Dilliplane, S. (2012). Race, rhetoric, and running for president: Unpacking the significance of Barack Obama's "A More Perfect Union" Speech. *Rhetoric & Public Affairs, 15*, 127–152.

Federal Elections 2008: Election results for the U. S. President, the U. S. Senate and the U. S. House of Representatives. (2009). Federal Election Commission. Washington, D. C.

Frank, D. A. (2009). The prophetic voice and the face of the other in Barack Obama's "A More Perfect Union" Address, March 18, 2008. *Rhetoric & Public Affairs, 12*, 167–194.

Frank, D. A. (2011). Obama's rhetorical signature: Cosmopolitan civil religion in the Presidential Inaugural Address, January 20, 2009. *Rhetoric & Public Affairs, 14*, pp. 605–630.

Frank, D. A., & McPhail, M. L. (2005). Barack Obama's address to the 2004 Democratic National Convention: Trauma, compromise, consilience, and the (im)possibility of racial reconciliation. *Rhetoric & Public Affairs, 8*, 571–594.

Gerson, M. (2009, January 21). The conservative revolutionary. *The Washington Post*. Retrieved from http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2009/01/20/AR2009012003569.html

Grossman, C. L. (2009, January 22). An inaugural first: Obama acknowledges 'non-believers.' *USA Today*. Retrieved from http://usatoday30.usatoday.com/news/religion/2009-01-20-obama-non-believers_N.htm

Hulse, C. (2009, January 21). Obama is sworn in as the 44th President. *The New York Times*. Retrieved from http://www.nytimes.com/2009/01/21/us/politics/20web-inaug2.html?pagewanted=all

Kennedy, J. F. (1961, January 20). *Presidential Inaugural Address*. Washington, D. C.

Murphy, J. M. (2008). Power and authority in a postmodern presidency. In J. A. Aune & M. J. Medhurst (Eds.), *The prospect of presidential rhetoric* (pp. 28−45). College Station, TX: Texas A&M University Press.

Murphy, J. M. (2011). Barack Obama, the Exodus tradition, and the Joshua generation. *Quarterly Journal of Speech, 97*, 387−410.

Obama, B. (2009, January 20). *First Presidential Inaugural Address*. Washington, D. C.

Paine, T. (1776). *Common sense*.（邦訳：『コモン・センス他三篇』岩波文庫）

Paine, T. (1776, December 23). *The American crisis*.（邦訳：『コモン・センス他三篇』岩波文庫）

Reynolds, S. S. (2009, January 21). Writers praise Barack Obama's inaugural address. *The Los Angeles Times*. Retrieved from http://articles.latimes.com/2009/jan/21/nation/na-inaug-literati21

Rich, F. (2009, January 25). No time for poetry. *The New York Times*. Retrieved from http://www.nytimes.com/2009/01/25/opinion/25rich.html?em&_r=0

Rowland, R. C. (2011). Barack Obama and the revitalization of public reason. *Rhetoric & Public Affairs, 14*, 693−726.

Rowland, R. C., & Jones, J. M. (2007). Recasting the American dream and American politics: Barack Obama's keynote address to the 2004 Democratic National Convention. *Quarterly Journal of Speech, 93*, 425−448.

Rowland, R. C., & Jones, J. M. (2011). One dream: Barack Obama, race, and the American dream. *Rhetoric & Public Affairs, 14*, 125−154.

Sanger, D. E. (2009, January 20). Rejecting Bush era, reclaiming values. *The New York Times*.

Retrieved from http://www.nytimes.com/2009/01/21/us/politics/21assess.html?_r=2&

Terrill, R. E. (2009). Unity and duality in Barack Obama's "A More Perfect Union." *Quarterly Journal of Speech, 95*, 363−386.

Terrill, R. E. (2011). An uneasy peace: Barack Obama's Nobel Peace Prize Lecture. *Rhetoric & Public Affairs, 14*, 761−780.

The Declaration of Independence. (1776).

Whatley, S. (2009, February 21). Obama's Inaugural Address draws some criticism. *The Huffington Post*. Retrieved from http://www.huffingtonpost.com/2009/01/21/obamas-inaugural-address_n_159713.html